

第7章

「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群
の文化的景観」の本質的価値

勝沼地域の文化的景観を形成する基盤として、第1章では自然的な特徴、第2章では歴史的な特徴についてそれぞれ整理した。また、第3章から第5章では、自然・歴史の基盤のうえに文化的景観を形成する3つの観点について検討をおこなった。そして、各章における分析を踏まえ、第6章では文化的景観の構造として、特性・景観単位・景観構成要素を提示した。

本章では一連の検討を総括し、本調査における成果を概括するため、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」を本質的価値について論じ、今後の文化的景観の保全継承に向けた礎とする。

1. 価値の全体像

「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」は、甲府盆地東縁部における流通・往来と扇状地由来の土地が育んだブドウ栽培・ワイン醸造とそこでの生活が形成した文化的景観である。

勝沼地域は、内陸性盆地気候に加えて、東側の笹子峠から吹き込む冷温で乾燥した局地風「笹子おろし」の影響も相まって、昼夜の寒暖差が大きく、ブドウに適した気象条件を形成する。

さらに、甲府盆地において東側の縁辺部に位置し、江戸・東京方面からの玄関口として、近世以降の物資の流通やひとの往来において重要な役割を担ってきた。各時代における流通や往来は、ブドウ栽培・ワイン醸造の発展に大きな影響を与え、文化的景観の形成にもつながっている。

そして、扇状地に起因する東西方向の斜面地形と日川の河岸段丘に起因する南北方向の斜面地形は、敷地利用やセギ・水路の配置に代表される当地の空間構造を規定している。

こうした自然環境と社会的環境のなかで形成された日本一のブドウ郷は、どの時代においても日本におけるブドウ栽培・ワイン醸造を牽引している。そして、それに対する地域の誇りが有形・無形のさまざまな面で読み取ることができる。

2. 価値Ⅰ： 人と物の往来が生み出した 日本一のブドウ郷

近世の「勝沼宿」は、本陣1ヶ所、脇本陣2ヶ所、旅籠屋23軒を擁し、旅籠屋の数では甲州街道における45の宿場町のうち5番目の規模であった。そして、『身延参詣甲州道中膝栗毛』に描かれた

ように、近世から土産物などとしてブドウの生産と販売がおこなわれた。

笹子峠を越え、甲府盆地への東の玄関口に位置する勝沼地域は、その立地性ゆえに、近代以降も流通・往来網の整備とともにブドウとワインを中心とした葡萄郷として発展してきた。

明治時代にはじまるワイン醸造では、横浜に輸入され、消費されたワイン瓶や樽が笹子峠を人と馬によって運ばれ、再利用された。明治36年(1903)に初鹿野－韮崎間が順次開業し、勝沼地域周辺では初鹿野駅、塩山駅が設置され、人と馬に頼っていたブドウなどの輸送が鉄道輸送へと切り替わり、一度に大量のものを運べるようになった。鉄道敷設においては、地形条件やさまざまな要因によって盆地縁辺部を走るルートが選択され、大日影トンネルに代表される近代のレンガ積みトンネルが果たした役割も大きい。大正2年(1913)に勝沼駅が開業したことで、地域と鉄道の関係はますます縮まった。その際、岩崎から日川をわたる祝橋が建設され、生産場所から勝沼駅までの物資の運搬を支えた。

また、昭和に入る頃には、ブドウ遊覧が盛んになり、観光ブドウ園も増加した。この頃の地図や観光パンフレットでは「葡萄郷」という文言が多くみられるようになる。

そして、戦後の高度経済成長期には、自動車(バスを含む)社会となり、勝沼バイパス、中央自動車道が開通した。社会がモータリゼーションの時代へと進むなかで、東京から甲府方面へのひとの往来の中心も鉄道から自動車へとシフトし、勝沼バイパスの沿道などにも多くの観光ブドウ園が開園した。

現在でも収穫期の勝沼は、甲州街道を中心にブドウ狩りなどに訪れる観光客の車で渋滞が発生す

るほどの賑わいであり、観光ブドウ園の建物や看板は車の動線を意識して配置され、想定される車の進行方向に基づいた配置がなされている。

このように、近世以来、現代に至るまで、人や馬車、鉄道、自動車へと流通・往來のための手段やルートは大きく変わり、インフラの向上がブドウやワインの販売にも大きな影響を及ぼしてきた。また、ブドウを資源とした観光地づくりにおいても、首都圏とのアクセス手段の向上がもたらした影響は大きい。

いずれの時代においても、首都圏という一大消費地との近さを活かしながら、時代ごとに最適なインフラ網を利用して、ブドウ・ワインを最適な消費者に販売している。

3. 価値Ⅱ： 扇状地の地形を巧みに利用 した生活と生業（ブドウ栽培）

扇状地の扇央部に位置する勝沼地域では、東西・南北両方向に広がる緩やかな斜面地形における土地利用、また、水はけのよい地質条件の中で生活用水を確保して生活することが必要であった。

生業面でも、日照と通風性のよさから河岸段丘や東側の盆地縁辺の産地における斜面を巧みに利用してブドウ栽培を展開し、土地の斜度に応じてブドウ畑の整地を変えるなどの工夫もみられる。

近世の勝沼宿に由来する地域の主要街道及び集落は、日川北岸の河岸段丘上に位置し、街道の北側は田草川に向けて緩やかに傾斜している。したがって、甲州街道及び勝沼宿は南北方向でもっとも高い部分に位置し、そこを頂点として南北双方へ傾斜しているといえる。また、東西方向以降でも東側から西側へ緩やかに下っている。日川南岸の岩崎においても、地区の南側から日川方向に向けて傾斜している。

また、地域一帯には日川から取水されたセギを中心に、傾斜を巧みに利用して水路が張り巡らされている。セギ・水路は多くが敷地境界と重なり、屋敷の背割などにもみられる。これは明治期の公図においてより顕著に確認でき、少なくとも近代以降の勝沼地域の生活を支えてきた水系として位

置づけられる。そのほか、「勝沼宿」東側の一部では井戸もみられ、井戸・セギ・水路を併用した生活が営まれていた。

加えて、地域全体を見渡すと、日川を境として北側の勝沼は甲州街道の街道筋という立地、また宿場町由来という歴史を踏まえ、空間構成も含めて現在でも町場としての性格が強い。他方、南側の岩崎は農村的な性格が強い地域といえる。町場と農村が河川を境に近接し、それらがブドウの生産と販売など、さまざまに補完しあって地域が成り立ってきたという点もこの地域の生活・生業を考えるうえで特筆すべきことである。

4. 価値Ⅲ： 伝統の継承と時代への即応 性を併せもった生業と持続 と展開（ブドウ栽培／ワイ ン醸造）

勝沼地域は、扇状地特有の乾燥土壌と昼夜の寒暖差、さらには笹子おろしといった冷温の局地風がもたらした好適な栽培条件のなかで、近代以降、扇状地に適した農産物生産・販売のあり方を、流通・往來ネットワークの変化も含めた時代の遷り変りでのなかで追い求めてきたフロンティアである。

近世には水田と桑畑が混在してみられ、勝沼地域のごく一部に限ってブドウ栽培がおこなわれていた。近代になると、殖産興業政策によって、周辺の水田の多くが桑畑に転換されたが、勝沼・岩崎一帯ではブドウ畑へと変化し、次第に拡大していった。こうした傾向は戦後急速に強まり、1970年代頃には勝沼町のほぼ全域をブドウ畑が占め、現在の景観が形成された。

また、長期保存が可能な甲州種については、出荷時期を遅らせることで収益を確保することを目的に、段丘崖などに貯蔵用の「ブドウ冷蔵庫」を建設して保存し、正月頃に出荷することが長くおこなわれてきた。「ブドウ冷蔵庫」は、戦後は電力による冷蔵庫へと姿を変えたが、こうした出荷形態はその後も継続され、現在でも一部でおこなわれている。また、甲州種の生食用需要の低下に伴い、冷蔵庫は近年ではキウイフルーツなどの熟成などの用途にも用いられている。

生産・出荷体制も時代とともに大きく変わってきた。1970年代以前には、鳥居平などの傾斜農地では個人での消毒作業などは難しく、地区ごとに共同防除組合を組織して栽培に携わってきたが、昭和46年～63年（1971～1988）の国営笛吹川農業水利事業によって、畑かん施設が整備されると省力化が進み、傾斜地でも個人単位での営農が可能となった。また、ブドウの出荷もおおよそ区の単位で出荷組合を組織していたものが、農協組織の普及とともに旧町村レベルに広がり、現在ではより広い単位となっている。

しかし、他地域が大粒・種無しなどの新品種に移行する中でも、勝沼地域ではそれとあわせて甲州種の栽培などもおこなわれている。また、勝沼ぶどうの丘周辺では急斜面という耕作環境の厳しさも相まってデラウェアの栽培が現在でも持続している。受給調整協議会をはじめとする醸造用ブドウ流通の体制づくりの果たしている役割も大きい。共同醸造やブロックワインから企業としてのワイナリーへと移行するなかで、醸造用ブドウの流通システムも変化はしたが、ブドウとワインを地域内で結びつけるシステムは継承され、それが勝沼地域のブドウ生産に少なからずの影響を与えている。

甲州街道沿いをみると、近世から近代、そして現代にかけて、宿場町から商業町へと街道の役割が移り変わり、また、ブドウ園、あるいは観光ブドウ園が増加するなかで、建造物や集落配置もそうした歴史を反映していることがわかる。街道の東側ではミセをもつ商家建築や旧旅籠の建築などの歴史的建造物が多く残る一方で、街道西側では道路沿いにブドウ棚や売店を設けるといった観光ブドウ園としての土地利用形態が多くみられる。後者は曳家などにより建物を後退させた結果であることも多い。

このように、商品作物ゆえの即応的な変化と地域性をふまえた生産や社会システムの持続性、この両者が共存していることが勝沼の生業面で特筆される。

以上のように、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」は、盆地・扇状地・河岸段丘による独特の地形条件、ひと・物資の流通往来が生み出した町場・農村空間、ブドウ生産・ワイン醸

造が形成した我が国を代表する景観地として位置づけることができる。

（山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課）